

第1回 法科大学院全国統一適性試験 講評

平成23年6月8日

TAC 司法試験講座

第1部（論理）

1. 全体的な傾向

2011年「適性」第1回の「論理」は、特殊な解法を要する問題はなく、リーズニングへの関心を中心とするオーソドックスな問題構成であった。難易度は、標準レベルで、特に手間のかかる問題もないかわりに、少しずつひっかけがつくられており、注意しないとテンポよく解くことができない。易しすぎる問題も多かった昨年と比べると、高低の差が小さく、全体的なレベルも改善された。

推論の種類と問題点について理解を深め、どこに飛躍があるかを見定める力をつけていれば対応できる試験であったが、安易な蓋然的推理の欠陥をきちんと指摘できるレベルに達していなければ、もたついてしまう。この点が最大のポイントである。

付加された条件を見落とす、意味をとりちがえてしまうなど、勝手な思い込みで解き、思わぬ時間がかかってしまった問題が多かったという人は、次回の改善点は見えているはずである。

2. 問題概要

設問の種類は、大別すると、①推論の妥当性、②パターンの異同、③話題と共通認識の3種類。このうち①はさらに3種類に分けられる。

①「推論の妥当性」について問うものは、次のa～cの3種類。

a. 「推論の批判・主張の補強」——問題1, 5, 10, 14, 18, 21（計6問）

推論の不備をみつけ、批判したり、補強したりする能力を試す問題で、ハイスコア圏に入れるかどうかの分かれ目となり、特に重要である。

問題1は、推論形式自体を判別する問題で、〈前件肯定式〉（肢3）と〈前件否定式〉（肢2, 5）を見分けるのがポイント。肢2は〈対偶〉（後件否定式）ではないことに注意。

問題5, 10, 21は〔反論・批判〕、問題14, 18は〔主張の補強〕。

b. 「データからいえること」——問題2, 3, 8, 11, 12, 15, 22, 23（計8問）

問題2は、実験結果から一般法則を導く問題。

問題3, 8, 11, 12, 15は、事例を条件・基準・法則に当てはめて、整合性を判断させ

る問題。このうち、問題 11 (噂の伝達) は要注意問題。問題 12 は易しい分類問題である。

問題 22 は、データ処理問題で、足し算と百分率計算を要するが、易しい問題で、確率計算をする必要はない。

c. [原因推定] —— 問題 9, 16 (計 2 問)

この問題は、本文中には言及がないことがらを挙げて、因果関係が成り立つかどうかを判断させる問題である。

問題 9 は、世帯が増えるかどうかを考えればよいが、問題 16 (野菜の値上がり) は要注意。

② 「パターンの異同」を問う問題は、問題 4, 7, 17, 19, 20 (計 5 問)。

「論理構造が他と異なるもの」を選ばせる問題で、難しい問題はない。

問題 4 は、「 $p \rightarrow q \rightarrow r$ 」の形式が隠れており、A の発言に対し、B がどの部分を補っているかを考える問題で、この問題にまごつくようであれば、基礎力不足。

その他、規則の補説、リスク回避、課題の達成、頻度からの推定が出題されている。

③ 「話題と共通認識」を問うものは、問題 6, 13, 24 (計 3 問)。

問題 6 は、話題になっていないものを選ばよく、問題 13 は共通項の抽出。問題 24 (陵墓指定地と発掘調査) は、黙示の前提を考える問題で神経を使い、やや難。

第2部（分析）

・総評

ここ2年の傾向を踏襲して、簡単な問題が並んだ。昔の適性試験第2部の難しさは見る影もない。以前は大問1, 2, 3, 4と進むにつれて難しくなるのが第2部だったが、去年はその難度差が曖昧になり、今回も曖昧なまま。もはや日弁連は問題を難易度順に並べる事に意義を見出していないのかもしれない。内容を見ると、問題4に方程式で解ける問題が出たのが目を引く。問題1が場合の数を使わせる問題だった事と併せ、数学色の強い問題となった。

・出題形式

図が与えられる問題は無く、大問4題に小問が6問ずつで計24問。例年通りと言って良い。また「進むにつれて難しくなる」という、以前はかなり明瞭にあった難易度の構成は、はっきりしなくなった。これは去年も共通する所見。（なお、大問間の難易差のみならず、ひとつの大問内の小問間の難易差も、去年から不明瞭になっている）むしろ今回は問題1が、問題指示に特異な点があり、これを読み落とすと検討すべき場合の数が激増して問題難易度が爆発的に上昇した可能性がある。もしこの罫（別に意図的にしかけた条件ではないであろうから、罫という表現は不適切だが）にかかってしまうと、逆に「問題1が一番難しく、問題2, 3は簡単」と感じたかもしれない。

出題内容は問題1が（何通りか答えさせる問題は無いものの）場合の数に計算がからんだ算数的問題。問題2はスケジュールの問題、問題3は順序順位、問題4は方程式と不等式と計算、といったところか。問題2, 3はパズルによくあるパターン。問題1, 4は算数、数学的問題。

・問題難易度

問題内容の変化に戸惑った受験生がどれだけいるかにもよるが、去年とそう大きくは変わらないか、やや易化と見る。平均点は50点台、恐らく54~57点程度か。問題1は「手持ちの硬貨のうち金額の大きな硬貨から順に支払い」とあるので、小問(4)は金額500の銀白色の硬貨を持っていたなら、必ずそれを支払いに使ったことになる。ただし、その場合、他に二枚持っていた硬貨はそのまま、さらに釣り銭が加わるため、どう考えても支払い後の手持ちの硬貨が4枚にはならない。このように考えていくと、検討すべき場合の数は、そう多くはない。「金額の小さな硬貨で払っても良い」と勘違いしたら、この問題は時間ばかりかかって解けない。

問題2, 3は予備校で勉強していれば、そう戸惑わなかっただろう。特に問題2は講義で扱った関係分析と2図併用を戦術として採用すれば優しい。問題4の小問(3)は、実はつるかめ算だったのだが、分かっただろうか。中学生レベルの数学ができれば、そう手間取らずに得点できたはず。

第3部（読解）

1. 全体的な傾向

全体的な傾向に大きな変化はなく、単純なつくりの小問も多かったが、入りにくい文章に面食らって、読解の基本的な作業ができなくなってしまった受験生も出てきたと思われる。

問題数は、大問4問で小問が各6問（計24）と変わらず。

レベルについても、各大問につき1～2問、やや難しい問題がつくられており、例年と同様の調整がみられた。

文章は長めだったが、説明の重複も多く、小問6問という構成に変化はないから、本質的な変化ではない。

今回の試験のポイントは、大問の構成にある。山場が、前半（問題1と問題2）にあり、この2問への対処の仕方により成否が分かれる試験となった。問題1は、はじめに手をつける人とあとまわしにした人との分かれ、大きなポイントとなったのは、問題2である。読みやすい文章は後半に置かれたが、最も易しい問題4を、「哲学」というだけで敬遠してしまった人にとっては、悔やみきれない試験となった。

一方、問題1の公開鍵番号についての知識も持ち合わせている人には有利な試験となった。しかし、このような人は、受験生全体からすれば、少数者と考えられる。

問題1のような文章は、今年は試験が2回あるからボツにならなかっただけで、今後も続けて出題されるとは思われない。しかし、不案内な話題の文章が出題された場合には、割り切って「整理」をする力をつけておいてほしい。

2. 問題概要

問題1 レベル：知識の有無によって分かれる（小問の作り方は易しめ）

公開鍵番号について説明する文章。説明に比喩が多用されており、知識がないと読みにくい。しかし、単なる整理問題が4問あり（(1)(2)(3)(6)）、狙いがわかりやすい問題が並んでいて、部分的に解くこともできる。点差の開く(4)(5)は、正解肢にやや迷わせる表現が入っているが、誤肢消去がしやすい。

問題2 レベル：やや難

「労働・仕事・活動」について、アーレントの思想を入り口に、現代の問題を論じる文章。第1ページの後半に時間をかけてしまった人は、失敗。中略が多いため、話の流れがわかりにくい。が、はっきりとした図が繰り返され、〈飛ばし読み〉や〈重ねあわせ〉をすれば、要点はつかみやすく、「古代／現代」という枠組みもシンプルである。難しく考えすぎてしまった人は、小問をよく見直して、どのレベルのことが問われているのか

を、確認してほしい。

小問は、(1)(2)(4)は基本的、(3)は肢4を消して5を選ぶ問題。(5)は、「合致しないもの」に注意。(6)は、1を正解と判断しつつ、他肢の消去もさせるようにつくられている。

問題3 レベル：標準

音楽における、身体的実感を伴った表現の重要性について述べた文章。

(2)(4)は易。(1)(5)も基本的だが、ひっかかる人が出てくる問題。このあたりでまちがえると平均点に達しない。(3)で迷わなかった人はハイスコア圏に入れる。(6)は、対比を見極める問題で、肢を見比べれば、「日本」を一括りしてよいかが問われていることがわかる。きちんと復習しておきたい。

なお、出典の岡田暁生『音楽の聴き方』は、昨年「予備試験」の「一般教養小論文試験」サンプルでも出題された書物である。

問題4 レベル：基本

哲学の発生場について述べる文章。「哲学」の部屋に「無垢の感受性」を置いて、部屋分けすればよい。(1)～(5)は基本的。(6)は肢2を消して5を選ぶ問題で、きちんと確認して解きたい。